

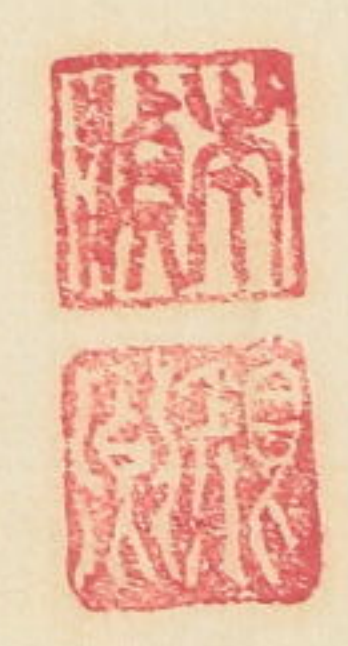


子田江新中春結
成身其亦佳境
新調字以長口且
云身管也為序



新觀女并巻之
有法煥寫

洞審門歌



文化四年歲

聖景

杉ののり志ぬ人の集

馬田江
鷄城

戸ののり志ぬ門の神極

萌明

鳥ののり志ぬ土路

竹園

歳旦

高橋のふもとに丹丸を置く

宗末

仙方の丹葉を採りて置く

狼のあしを踏む園を那

馬田江

正月
竹園

野あし

人まじり

梅葉

竹の



年序

梅の香も春の始り花の露も

まき

萌明

晩年

東の山もあふれて水の雲を裁

早春

空のひまわりはあめあめ降る

新緑

舟の客

あき

初秋

萌明



物日

吳服首の毛。真の入二日の水

有幸

三々五五様未

漱きけし流りや〜のまのまの葉

せいじ

糸川路の成るや〜のまのまの葉

る回

まのまの葉

弁女

はらたて

〜はら

まのま



元旦

書物のそとと書物の中

桃江

と尾

うしろの木のなかまのあそび

書物

書物の中と書物の外

桃江

あし 鱈のそと

十系兩

桃江



正明

日よりのや 雨の路をぬき井飯

可人

歳暮

近きも 遠きも ありの心音

春奥

木葉の 外も 海に ぬき 海の花

馬田

可人

可人

可人

可人

可人



翔旦

初々やあたふふあゝの神の歌

弓爾

言ふ

介限者といふあゝのあゝのさ

画賢

本所やあゝの朋縁あゝのあ

了田

あゝの

あゝのあゝの

あゝのあゝの

あゝの

あゝの



蝶巾 士高
 さくらんぼ
 水あめ
 大振栗
 一枝
 加々けり
 菊丸
 七五九
 包名教



末入
 赤いお菓子
 亀水
 餅巾
 月
 強き
 さくらんぼ
 七五九



新且 あつた

年指

お舟の針番
三川の船指

舟の回る回船

あつた

本真

赤黒白黒

うねり

お舟

芝竜



林

握

葉の

藤

五

麻
柄



正月

 正月の初日の事
 付くとおめでた
 事と云ふ事
 事と云ふ事

お正月はこれよりと云ふ事

年際

お正月はこれよりと云ふ事

本具

お正月はこれよりと云ふ事

和州大福

春芽更

元

馬田

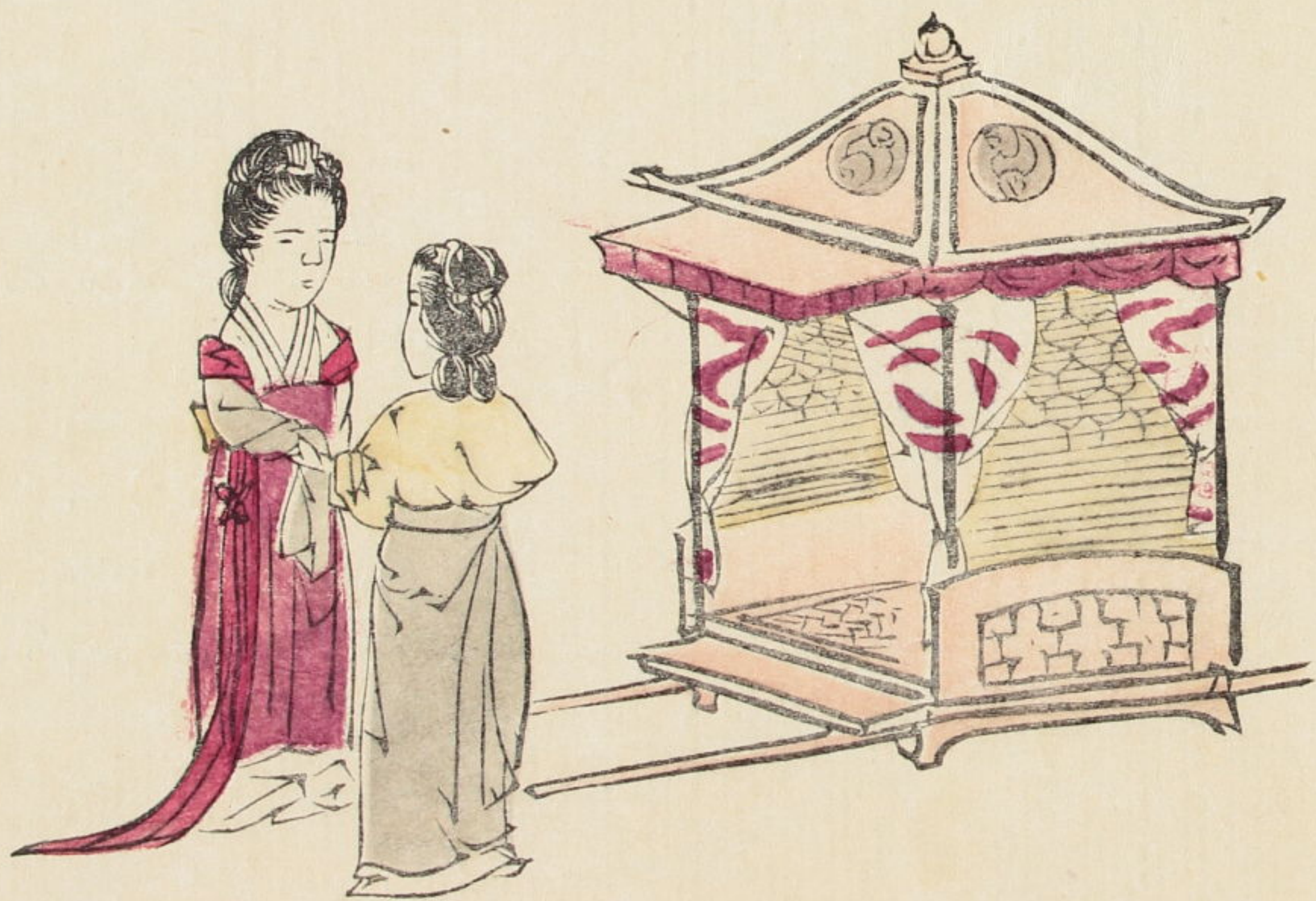
お正月はこれよりと云ふ事

お正月はこれよりと云ふ事

お正月はこれよりと云ふ事

お正月はこれよりと云ふ事

元



鶴旦

初雪も 乃ら物も してあまらふ

内言

静の世の 一の屋に 浅梅の

真真

二日 夕に 飛鳥の 鳴き声

葉集更
富春

馬田江

竹の毛

冬

冬

野

冬



茶豆

えんちやをいんちのちんちん

日

竹晴

来未

りごしんねおしちぬのふ

真奥

柳吹雪のちんちん

弱城

七井の

芥菜

摘みよ

いんちのちんちん

和竹晴



元朝

月花の簪やかたかたの籠

日三編

一清

歳暮

波風とあそびあそびあそびあそび

東へ人のあそびあそびあそび

馬田

一清

忘

すき

白

甘



歳端

待けりて用事も月夜の影を

日十市
可夕

古事

小初瀬の山雲北條の雪

古事

ちるはくた筆目みまね様か

歳旦

元果林は河海に花を

日田原本
靖城

冬吟

霧も暮しをさしぬるの

古事

くはあのをさしぬるの

茶且

早うあきさしのかさやゆの事

日

三巴

茶且

やけは茶葉の可成るなを以て

茶且

あつたやけの影も多き事

茶且

えんやふ早布留部石上

日

某致

世の本

手かきも果然と先の事なり

元旦

算の種をいさむとせむと云ふ事

日

井王

茶且

翠やあけ除あつた人より

正朔

ふ扉の影今折れかき初花

日大綱

東柳

冬茶

折れけりもあつた影の如く

茶且

い枝も桜あふれおほら月

兼且

しつゝと掛さう形一宿の暮

日三輪
巴橋

正節

辛酉の
お正月

安らぎぬ門の松葉の若みさ

日八百新町
一鳥

子夜

子夜あゝ一葉ちのゝおや少ね

蒼大

斬さるやうにを明の暮

日
完廬

宗書

あゝと〜〜夢買の物のまの布

去奥

鶴鳩啼ゆ人々の奥の杉乃水

馬岡

あやあや

人さす事此

あふ

あふ

完一層



瓜英

字の終るあ

あふ

掉

の





あまのついで

猫

あまのついで

猫

烏扇



春興

春の野や何處までもあそび

可憐

新緑や柳のやぶらぐは

楳洞

歳旦

この水や松の香は小松の風

竹晴

浪子

春典

水きゆやと花のそけいのおきん

春岡

梅の香れ音はる水のぬきて

梅園

梅の心我ゆく古葉のはらめり

里席

春典

梅きんた 河内へちりし梅の系

宇梅

争うけて花のさるおれ梅の

二笑

くれ月夜 梅の心はる花のれ

馬回江

鞆疑のらて杜稗のきりん
其特し春史の廿五の妻
白子母とわく久の妻の若御和
聖のりみで馬の過也
生流我滯るぬ能る詠課を
酒の醒れを呼きこくを
山白傳の夢の廓のこりきよ
あまこもるき鬼王こい

川、城、川、城

殉死をうそ悟り腹の心と臆
温泉より病の治る妻物其
お妻しみるるね福の巻もし
くらほそかがお近の妻の心
鳥成拾ひ五としのほ守がみ
糸の糸を布た秋風とあは
ハ色やれ陽まの形まぬ月の色
于公をたてて于公我ト

川、城、川、城

薄き岩田の少将のまゝ
 誘ふ合のまゝ半号
 雲が少部より和尙師者あり
 袋はもんて涼や法中脈
 級第の法少部の名あり
 國の月かきと甚高君の代

等、城、川、

海を

亀種

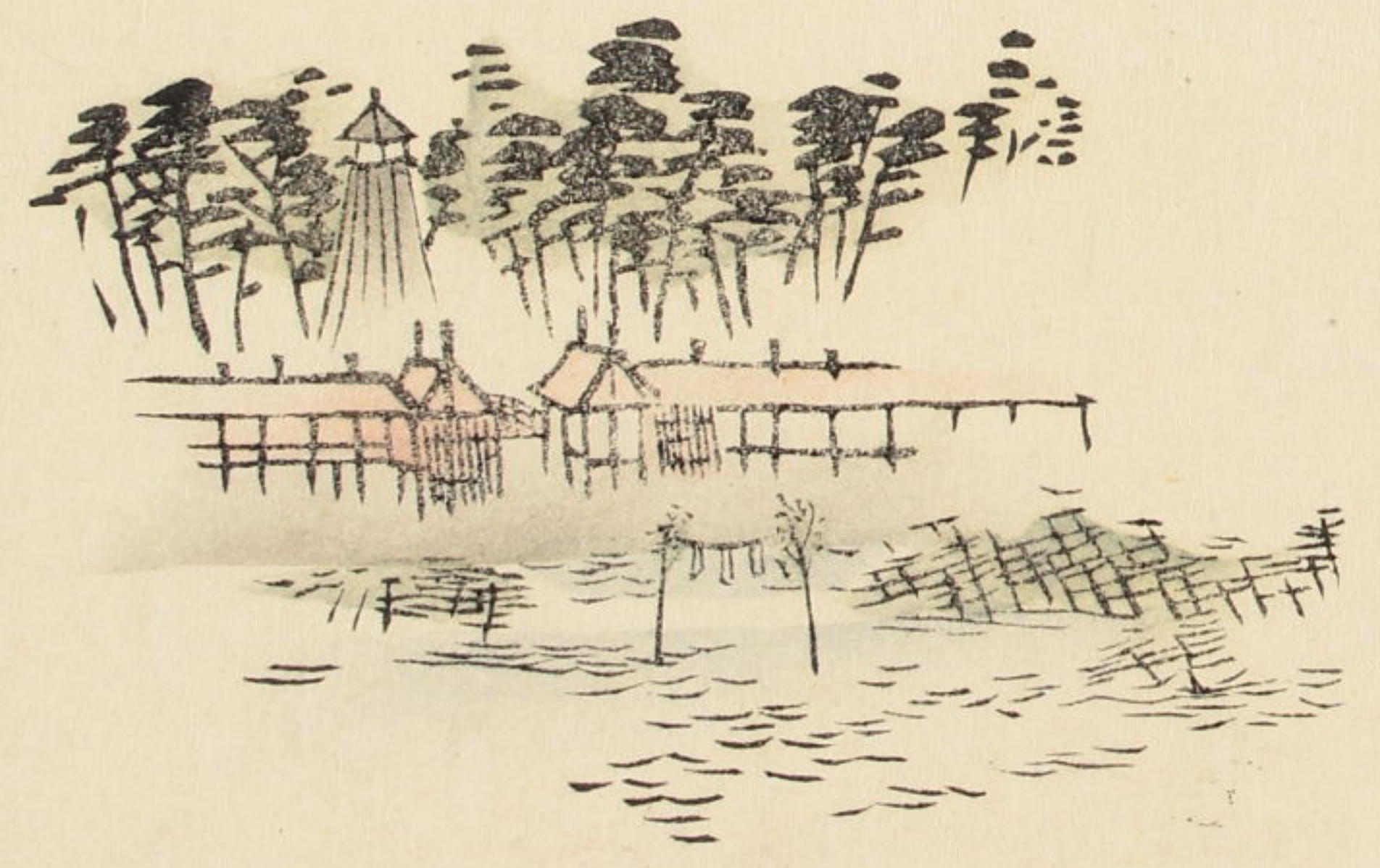
山
 山
 山

山

山

山

山



其の盛なり
 梅
 佛事なり
 寺
 是
 梅岳



聖旦

相違て道の廣きなり

寺門

梅岳

宗景

山尊より道なり

寺門

寺

全

志
 梅乃
 おぼろ
 花
 おの
 鶴
 郷



鳥の
 栗の
 枝を
 握り
 文都



二月二十日
廿日草
朝捕



白鳥や水の
ほろの如き

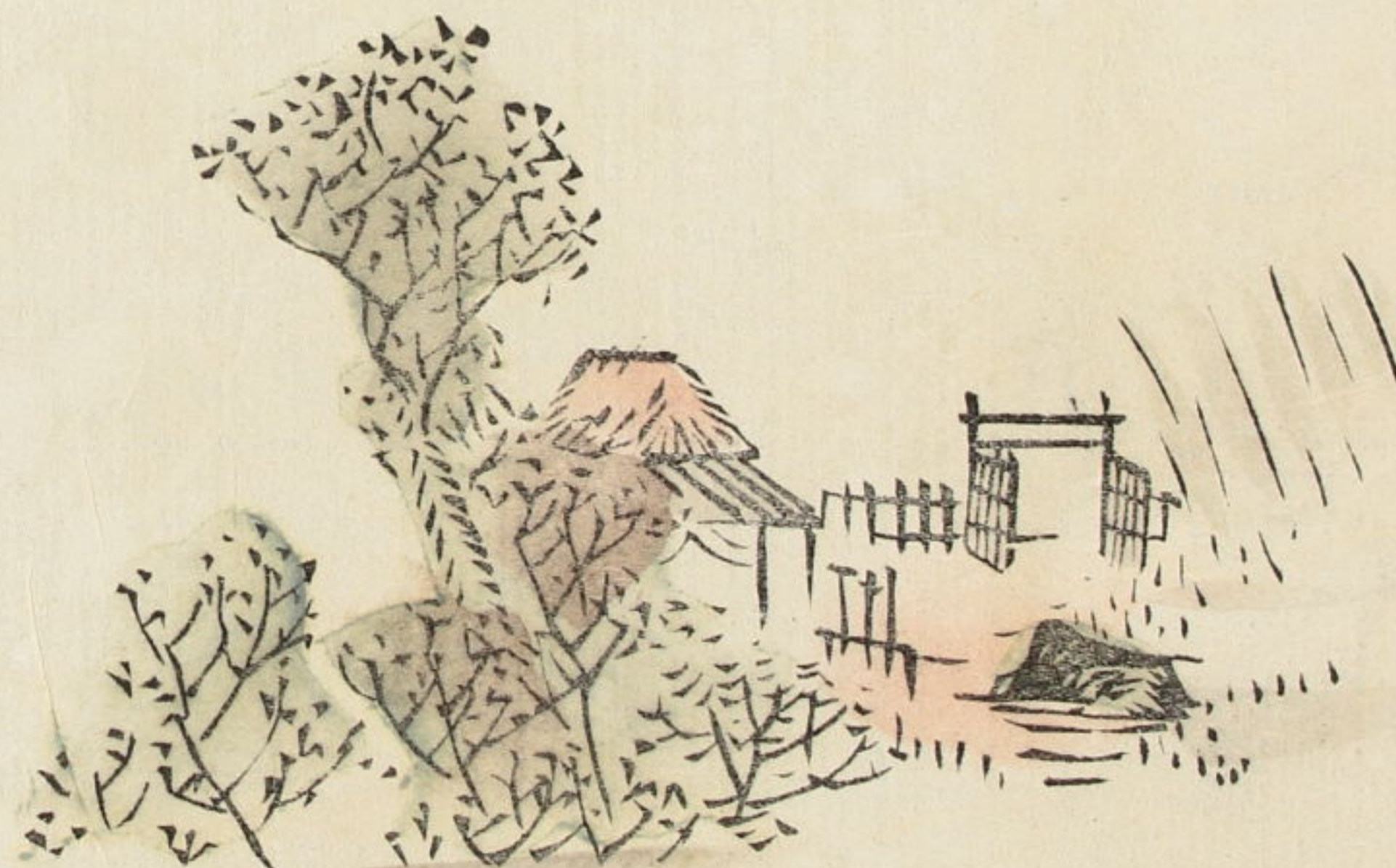
舟
栞



急草水柱
きんり
寺の鐘
里隠



急草水柱
鳥居
不破の関
澄我



昔のより死にゆく方々の秘蔵 村上 章花

とれ乃蓮の大意をあらわし

小晦日

春戸に

疎かなるを梅の月

日々に心ゆくはるく志

梅の節

馬回江



花

明

春の蝶

播三木

巴涼

杉の野おほろ

あまの

影か

橋野路
素子

あまの

あまの

あまの

あまの

日
到
女



吾真

姫
冬
後

唐のおま

あまの

冬
宗

お
源
の

さ
免
ぬ
胸
袋

あ
ま
の





元日

胸鎮昨夜躍顔伸曰冬皴
月代与衣服御慶荒玉春
商人子今於此困能安也
言分有藤末

懸取暫潛氣海藏萎功名

守戸鱈魚眼吐雲厄掛声
麦脹腹八合豆愧手餘程
擬胞横拒御風寒節季情
系不親ふか多世豆能救

右

附寧門

姫府

有是出北



年之

歌集

えの巻々も一つ和歌よみ

五言

あはれもつらもあはれふりよき哉

まゆみま

一平のうちはよきもあはれりてみ哉

年之

春の日はそそぎてしよの巻

うら

在真

春の日はたしよあはれりてみ哉

尺五の志回をゆきぬをみ此雨

可人

春の日はほろぬをみ此雨

春川中島のうつり棹のうら

龜水

柳花と男は白し五形をみ

有毒

夕下ける小舟は春の瀬川哉

挑江

あはれもつらもあはれふりよき哉

春興

夕紅の何ちうふさし初浪の嗅

まの書いふ女他は正喜の月

何さうやうそんあうそんあうそんあう

右三章

馬田江

